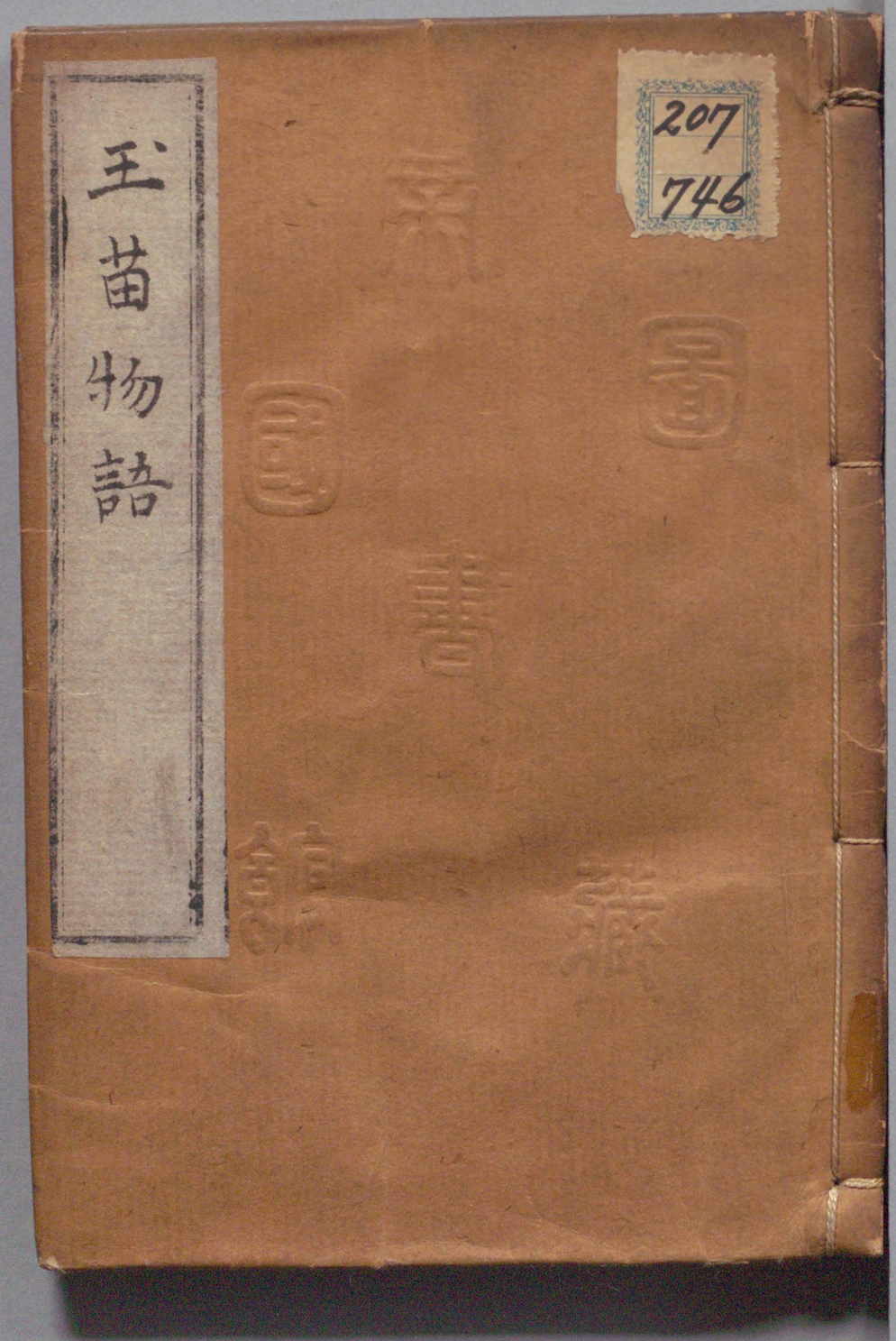


国立国会図書館　　玉苗物語 2編5巻 207-746

ガラス使用

207
746

一九亭政昌著

国立国会図書館　玉苗物語 2編5巻 207-746

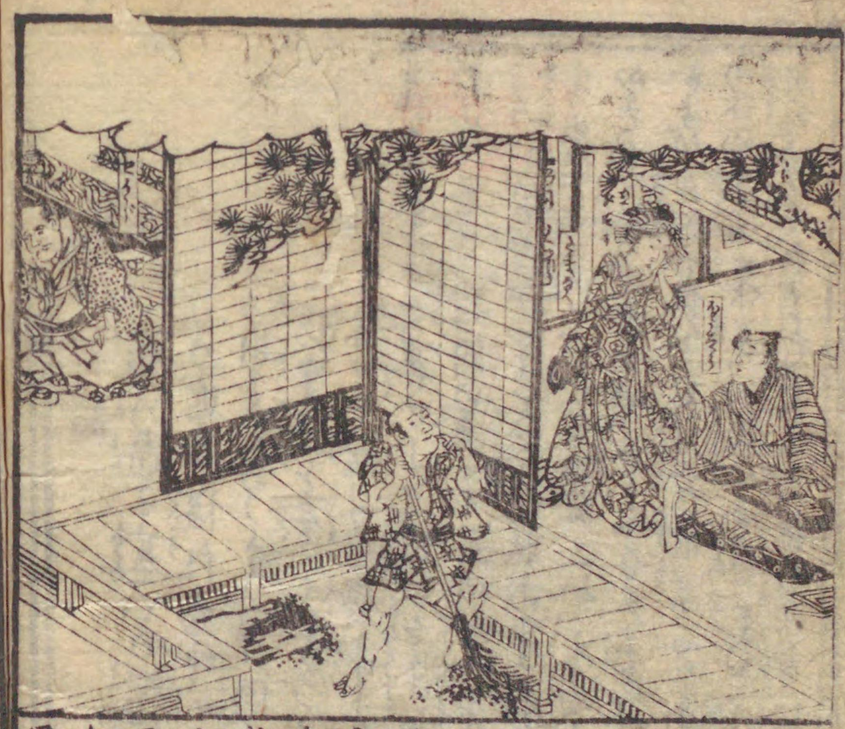
ガラス使用

玉苗

故を温物きを知るは道に基くの理。終るを嗣。廃るを興。
是を弘るの始なり。近来復仇物語の草史。温行し。昔の滑稽
笑談を作せる時よりかかりたり。弔偶反古の中より一本を見て是を
まるに。男女の実情を尽し。おのづから人をして感ぜしむ。その風
製浣思温和にして。婦女の懸本とするにたれり。依て今その所
不足を用捨し。欠畧せしを補ひ。今年初夏の物版とまとそれ以外の
[illegible]やあらん。駿河の國菜科の今の今土安祖の庄司といふ人の農祖
[illegible]家にして。田畑山林あまた所持し。同家の大阪にも。おさく
[illegible]活斗なりしが。そ来以外におとろへ。今の庄司にいたりて。昔の新名音
かまたに称り。家長減少がちなるとども。いまだ居住の男女は五六人に
およびて家柄なれば。自身農業にはかまをおろさず。安逸にあるまで
つゝに連俳茶花の翫びに星霜を送りたるが。庄司に子二人あり。惣
所は芳吉郎とて。当年十八歳。[illegible]利蕣よのつゝるらず。[次へつゞく]

国立国会図書館　玉苗物語 2編5巻 207-746

ガラス使用



妹も美しくそして十五第三も生れ付美形でしかもやさしうさ
ばかりまた庄司の妻そのべつふうの
兄連独の泊三とのみうとふ一人の
娘あり婿三郎美男子で父母の寵愛
を限りなりしが泊三病死しそのよう
その妻もつづいて死まうの娘一人を
ふ押仗せうま娘一人をままべ
きはるく伯母のとられが庄司の
妻のうへ。こととうとうとうがこの
娘をを玉苗とりひそこに十四第
まそだつ。庄司が寿仗の第で叶
玉苗よんあれが。ゆとそーしてお
もあがらひようこんと男ひろげ人
同ちがく。其上いまごろ〜とうく。

ちがうげまそ。むをとがをみそ
玉苗もキ發まそ。苦ちゃめ美
男よんこ死めき男ひありげふ兄人
ろが。あ時庄司夫婦へ佛ふの
るまを當玉まそ。苦きこひろ。新やふ年
るく禮ろそぬうし時。玉苗花江の
さがう義娘まそ。苦ちゃのろをへ。菖蒲み
を特。お淋しめこんと妹れ
ようこ。ちんさるてーとき苦亜そんん
とまるを。苦きう袖をひへ思ひ
のこけをこひようて。終まめれそめ。
そをとうん。こひふをまぐく
源き氏中とう。浪あお部屋よ
ろうこうる

国立国会図書館　玉苗物語 2編5巻 207-746

ガラス使用

国立国会図書館　　玉苗物語 2編5巻 207-746

ガラス使用

国立国会図書館　玉苗物語 2編5巻 207-746

ガラス使用

国立国会図書館　玉苗物語 2編5巻 207-746

ガラス使用

国立国会図書館　玉苗物語 2編5巻 207-746

ガラス使用

国立国会図書館　玉苗物語 2編5巻 207-746

ガラス使用

つぎにちくせつさこそもくさきうう
べーひかごろからぜごくいろんうえ
あくうさそうみのみのうちろうろう
すばらしゆうこそあるかかとそやく出
ろうえんかやうやうろうへのてかさのどくうう
やうそてちくうへのてかさのどくうう
まちく　ねぜあれうー　こぜてめこてれ
やうちそーぜひうそうそうてこうろうそ
まろくんやりそこうそうてこうろうそ
ぜもちのまへよりでなれぜ
せんに　ゆくうくぜのぜ
おことぶうくぜのぜ
もとそうみをもせぶとうそ
ごりろうよろことびうう
ろろやくちそーあるうう
いのそぎこさげうのと
ろうとれなのがへやよ
ちこうち
ろうえりうれだ王
ちまるぐーろれするき
とあぶってるさ
りうりうちうぜれ
ろうんぜるくめとくろ
ちろうあさをまくくし
るそくがしてやうちそ
うのろをとろうとしひ

▲かこれまうえんせぜぜて
ものがさとスとこうて
ちくかーぶのの
ぜきとス、
かうそそ
のの白く
まる
ぜ色
ゆく
うそうよ
やうぶうそ
そうみうそーあう
いやんとはの
ぬドぜんの
とくうそて
てのうそくへ
さとうく
ろうまき
とうあち
れが

国立国会図書館　玉苗物語 2編5巻 207-746

ガラス使用

国立国会図書館　玉苗物語 2編5巻 207-746

ガラス使用

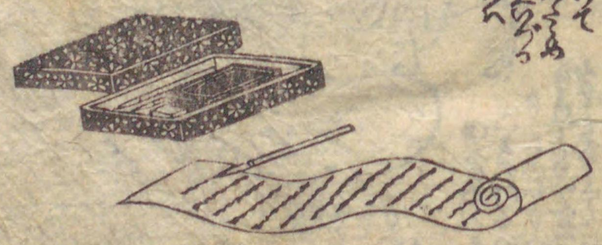
つぎに玉もろくさんせうといふて
ひとの事のうきことをかうれくわあ
ものぞかやのとこがとるもひぢなり
ひくてきさうとこをちるといふて
すこしくわとやらげてい
あるうちはるがとこともあるがの
ゴがすてうもちのへきがさんへ
うくいるくこのわうのよまりんも
ちあいるくこれもすって
きをだいつえこれもそこ
やそこをしらえこれもすって
まるとえうにおやのうんきこと
ざうやくらのむくくねこるでスくそ
まにこてそうへさんれるわくくらの
うこまのおとめのれがひろるひて
ひざうさこもぶえ〜
ひごろそのゆて
おこのようことが
大そこうくそ
それさけても
そうくかうちくの
そうるかのおけさ
ひもへきくぐくるぐさめ
せんの上をとよびて考
れくをるのくさまのの
こよろまでうくみそをみる平〜

国立国会図書館　玉苗物語 2編5巻 207-746

ガラス使用

国立国会図書館　玉苗物語 2編5巻 207-746

ガラス使用



国立国会図書館　玉苗物語 2編5巻 207-746

ガラス使用

国立国会図書館　玉苗物語 2編5巻 207-746

ガラス使用

国立国会図書館　玉苗物語 2編5巻 207-746

ガラス使用

国立国会図書館　玉苗物語 2編5巻 207-746

ガラス使用

国立国会図書館　玉苗物語 2編5巻 207-746

ガラス使用

国立国会図書館　玉苗物語 2編5巻 207-746

ガラス使用

国立国会図書館　玉苗物語 2編5巻 207-746

ガラス使用

国立国会図書館　玉苗物語 2編5巻 207-746

ガラス使用

国立国会図書館　玉苗物語 2編5巻 207-746

ガラス使用

国立国会図書館　　玉苗物語 2編5巻 207-746

ガラス使用

国立国会図書館　玉苗物語 2編5巻 207-746

ガラス使用

国立国会図書館　玉苗物語 2編5巻 207-746

ガラス使用

国立国会図書館　玉苗物語 2編5巻 207-746

ガラス使用

国立国会図書館　玉苗物語 2編5巻 207-746

ガラス使用

国立国会図書館　玉苗物語 2編5巻 207-746

ガラス使用

玄肪法師譯

近刻 全六冊

聖武帝の中時皇后菜窓のあるり
玄肪驕奢物語也 十返舍一九著

十返舍一九作 貞

北尾美丸画

御かなれ
妙藥 美艶仙女香 一包 四拾八文

此清くすゝ八享保十一年廿一番乃舩主伊宇丸と云る
清胡人長崎偶居の時丸山中の近江屋の遊女菊野に
授る顔の薬の奇方なり傳へいふ清胡今の世宮中の
婦人常に此薬を用ゆく粧をかざるとぞ右の傳方語をて
弟が家に傳へる此度世に弘むるものなり今世上に顔
の薬と稱するものあまたありて色ハいづれも初雪の如
まどにせる薬なれども家方の妙薬ハ別様の奇劑なれバ
世上の顔のくすりと一列に下看すふとなるまゝ
功能左に志るし

国立国会図書館　玉苗物語 2編5巻 207-746

ガラス使用

207
746

▲常に用ゆくいろを向くしきりとなるなれば▲そこはそばすかはし
▲できものくわと成れなく治れ▲いもがれに用て喜ばんといも治れ
▲ゆきびかれてできものに妙なり▲そこ成るなれば業ゆゑ
君に用ゆまバ業しけてきかれに志ハのよるなりなし
▲惣才一切のできものによし▲ひゞあるぎれあせもに
妙なり股のされ共十まる所へきり貼てよし

調合賣弘所 江戸 南てんま所三丁目 いなりちんた いなりのまゆどうりにて 坂本氏

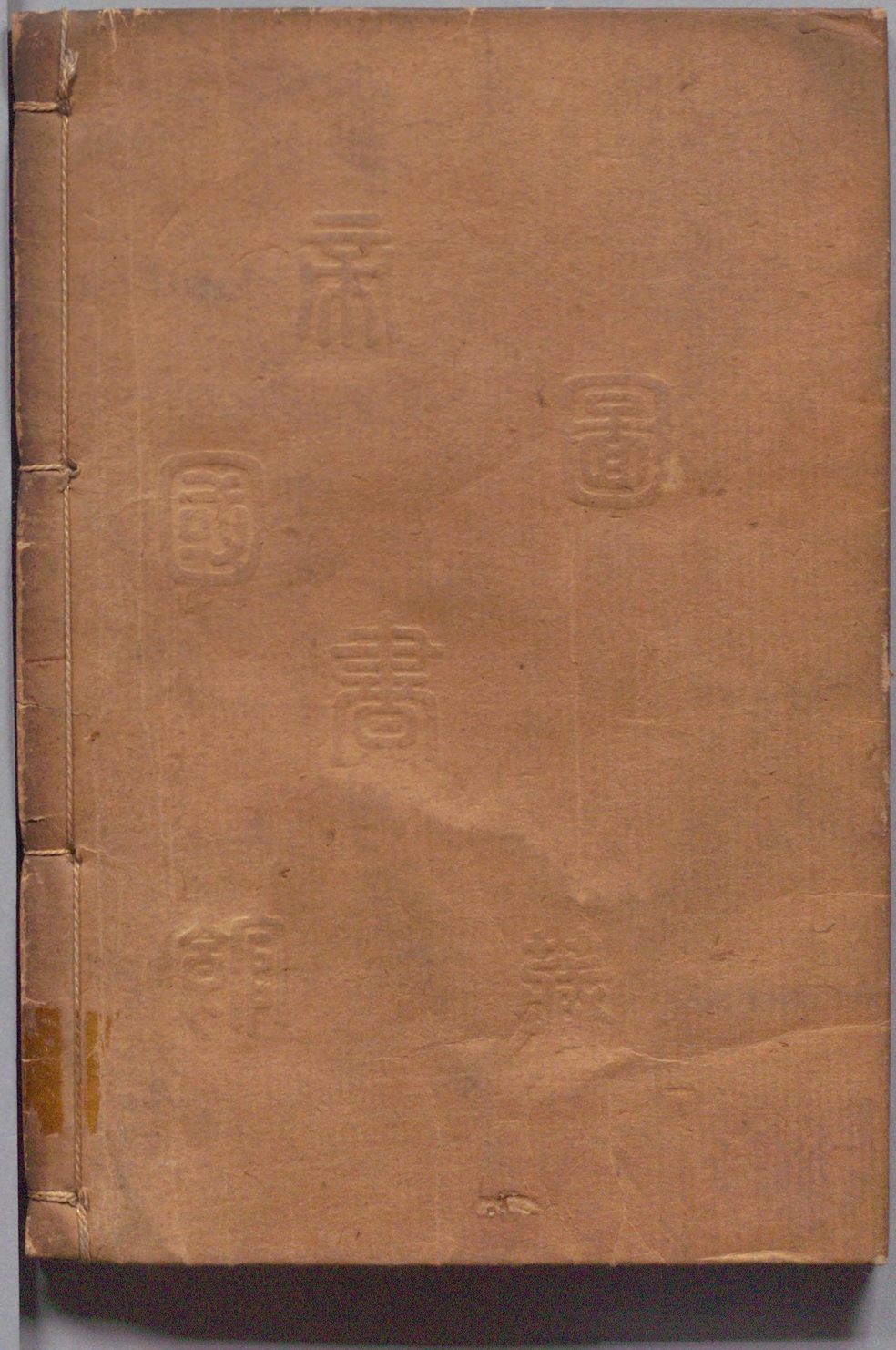
江上 右の居くすり十包以上はりとめ 其外ぐ 御所 三重居 立者 立役 女殿 正めい 自筆の御扇子けの所にして 居下ゆる 十包以上は求めと 其外ゆゑ 御姫の 御名 名前 御ひかけ 御ひかけ 其外ゆゑ 御ひかけ 御ひかけ 御ひかけ

国立国会図書館　玉苗物語 2編5巻 207-746
ガラス使用

207
746

国立国会図書館　玉苗物語 2編5巻 207-746

ガラス使用



国立国会図書館　　玉苗物語 2編5巻 207-746

ガラス使用